

「益田氏」が残したもの

益田氏は、七尾城下の益田本郷地域を中心としたまちづくりを進めました。七尾町を中心に幸町まで広がる城下町の整備を進めたのは、南北朝時代に活躍した十一代兼見でした。兼見は益田氏館の三宅御土居を築造し、萬福寺を創建するなど、現代に残る益田の中世的景観の基礎を作りました。兼見の時代から元祥の時代にかけて形作られた道筋や地割りが現代まで残っており、地名からも中世城下町の名残りが確認されます。

十五代兼亮は、近隣の武士団を東ねて石見国（現在の島根県西部）地域連合の代表となり、安定した統治を行いました。彼は大内氏



▲城下に残る「上犬ノ馬場」「下犬ノ馬場」「上市」「中市」「下市」などの古い字名から、馬術の鍛錬場である馬場や家臣の屋敷、市場などがあつたと考えられます。

（現在の山口県に勢力をもっていた大名）に従って各地の戦乱で活躍する一方で、市内の寺社を手厚く保護し、水墨画の大家である雪舟とも深い親交をもっていました。そのことは、益田市が所有する重要文化財益田兼亮像や、雪舟作庭と伝えられる萬福寺庭園、医光寺庭園から見てとれます。

安土桃山時代の終わりが、十九代藤兼・二十代元祥の時代になると、従っていた大内氏が滅ぼされ、益田氏は存亡の危機を迎えます。この頃、藤兼が毛利氏（現在の広島県を中心に勢力をもっていた大名）との戦いに備えて七尾城を改修し、山の上で生活していたことが発掘調査によって判明しています。毛利氏と和睦した後は、毛利氏に従って各地を転戦し、豊臣秀吉が行った朝鮮出兵にも加わりました。その後、関ヶ原の戦いに敗れた毛利氏に従って長門国須佐（現在の山口県萩市須佐）に移り、益田氏は長州藩の永代家老を勤めました。

四〇〇年にわたる益田氏の統治によって、中世益田の繁栄がもたらされ、城館や城下町、様々な文化財が現在の町の中に色濃く残っています。

※お詫びと訂正
8月号掲載の中世益田講座で誤りがありました。お詫びして訂正します。
誤 500年間 ↓ 正 400年間